

8

東福寺莊嚴院にある
吉益東洞と中西深齋の墓の現状について

黒川 達郎

黒川醫院

「万病一毒説」で江戸時代の医学界に旋風を巻き起こした古方派の大家吉益東洞には多くの弟子がいるが、中西深齋は岑少翁や村井琴山らと並ぶ高弟の一人である。

東洞と深齋の墓は、京都東福寺の塔頭莊嚴院に向かい合って存在し、演者は同所を日本漢方の聖地と考え、機会あるごとに訪れ、お参りすることを習いとしている。東福寺は紅葉の名所として知られ、京都五山の第4位に位置する。莊嚴院はその塔頭の一つであるが、組織的には天徳院という塔頭の下に属する。以前は莊嚴院の中にある家屋に東洞の研究者である住職が住み込んでいたが、現在は夜は無人で昼間は家屋は保育園として使用されている。

ところが平成25年9月、演者は8年ぶりに同所の墓地を訪れ驚愕した。東洞の墓石と向かい合って存在しているはずの深齋の墓石が消失していたのである。良く周辺を捜すと深齋の墓石は他の無縁仏の墓石と共に、番号札をつけられて一か所に集められていた。

日本漢方を学ぶものにとって、『傷寒論弁正』『傷寒名数解』などの著書があり、後の傷寒論研究に大きな足跡を残した深齋の墓が東洞の墓と向かい合って存在することは、師弟のあるべき姿の一つの典型として認識していたので、その衝撃は大きかった。

深齋の仕事は東洞の弱点を補うものであり、臨床の道を閉ざして一意攻究すること三十年に及ぶ仕事で、当時の人々は「寂々寥寥中西の居、年々歳々傷寒の書」と評したという。それだけに知名度は東洞に大きく及ばないものの、識者間での評価は極めて高い。

この際の事情は『漢方の臨床』第6巻11号2013年に墓の写真と共に報告したが、このときから東福寺法務執事で莊嚴院の管理者である爾英晃氏との交流が始まった。演者が深齋の墓石が消失した事情を電話で聞いたのだせいである。

氏は次のように説明してくれた。「東洞についてはある程度の知識があるが、深齋については全く知識がなかった。寺には寺の経営上の事情があり、無縁仏になっている墓石と土地をそのままに放置するわけにはいかない」と。親しくなって胸襟を開いて話ができるようになって聞いたところでは、「日頃お参りにも来ないくせに、そんなことを言われても困る」と思ったそうである。

爾氏は演者よりも十歳以上年下であるが、落ち着いた物腰で理性的に話をされる方であり、無縁仏になった先哲の墓の保存について話し合いを重ねるようになり、共通した認識として次のような結論に至った。

この問題を個の問題にしてはならない。例えば個人的な献金や寄付集めをすれば深齋の墓石を元に戻すことはすぐにでも可能かもしれないが、それでは根本的な問題の解決にはならない。時間が立てば、深齋の墓石にまた同じ問題が起こりうるであろうし、深齋以外の漢方の先哲でも当然同じ問題が起こりうる。

拡大解釈すれば、他の科学、芸能、政治などの分野の子孫のいない先哲の墓石についても同様の心配が起こりうる。というよりすでに生じている可能性が大である。

現在、深齋の墓石は依然として番号札をつけられて、無縁仏の墓石の一つとして一か所に集められている。演者は同所を訪れる度に申し訳ない心地がして、未だに深齋の墓石を元に復旧する道が見つからぬことに焦燥感を覚える。

今回、この演題を出す目的の一つは、広くこの問題を多くの先生方に共有して認識して頂き、例えば学会などで永続的に先哲の墓石を管理する方法はないであろうかなど、叡智を集めて解決の道を探したいからである。

いずれにしても、学会と寺社側が対立するのではなく、共通の問題として捉えたいと考えている。